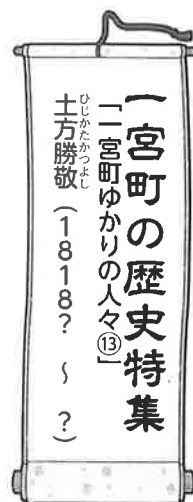


平成31年4月号



土方勝敬は幕末期の江戸幕府の旗本で、最後の浦賀奉行をつとめた人物です。

土方家は江戸時代初期から東浪見村の支配に携わっていました。東浪見村は大多喜藩領ののち、幕府の旗本の相給地(あいきまう)の一つの村に対し複数の領主が割り当てられることとなり、土方家・服部家・興津家・高林家の4家が領主として確認できます。

勝敬は天保9年(1838)に土方家を継ぎ、弘化3年(1846)には使番となっています。その後さまざまな役を歴任、文久2年(1862)には火付盗賊改方頭、元治元年(1864)に浦賀奉行に就任しました。明治維新を迎えたのち、慶応4年(1868)に奉行所を新政府に引き渡しました。そののち、勝敬は家族とともに東浪見村で余生を過ごしたといえます。

さて、勝敬と東浪見村との関わりを少し見ていきましょう。正満寺の過去帳の中に確認できるほか、東浪

見寺にもその足跡があります。戦時中に供出されてしまったという寺宝の唐銅額(約120kg)は弘化4年(1847)に勝敬が東浪見寺に寄進したものだといえます。また本堂につながる階段も勝敬の奇進と伝わります。

このように、今に伝わるものは数少ないですが、確かに土方家は東浪見村の支配を行っていたことが分かります。

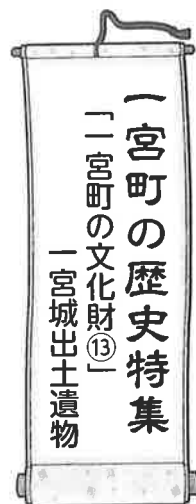
※寛永2年(1625)の土方家の初代・勝直宛の朱印状によると、土方家の一宮に関わる領地としては、東浪見村1250石、宮原村250石がみえます。



▲ 東浪見寺のふもと

問合せ 教育課 ☎(42)1416

令和元年5月号



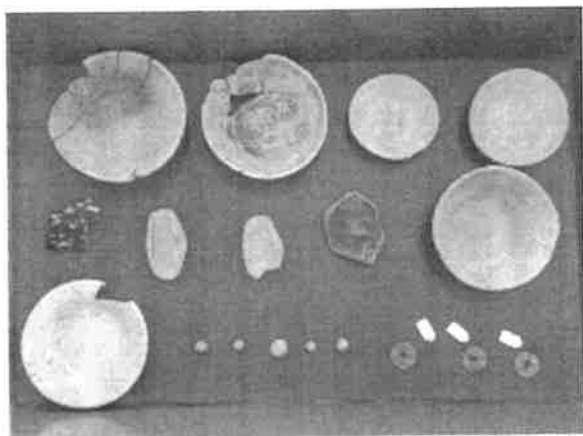
一宮城は戦国時代頃まで存在し、この地域の拠点の一つとして存在した城でした。

昭和58年(1984)、振武館建設に伴い、城跡の一部が発掘調査されました。この発掘で建物跡や池跡が発見され、多数の土器などが出土しました。この出土した資料が一括で平成17年(2004)に町の指定となつています。

具体的に出土したものとしては、陶磁器やかわらけ(土器)、鉄砲玉、古銭、石塔、鉄製品(武器・武具の一部)などです。年代は戦国時代の16世紀、1560〜70年代ではないかと推定されています。特徴的なものは鉄砲玉と耳かわらけ、中国産の鉄釉茶碗で、県内でも非常に少ない出土例の一つです。耳かわらけは耳のような形をした土器で、箸置きとして使用されたものではないかと考えられています。

一宮城の城主は里見氏の家臣である一宮正木氏だったと考えられている

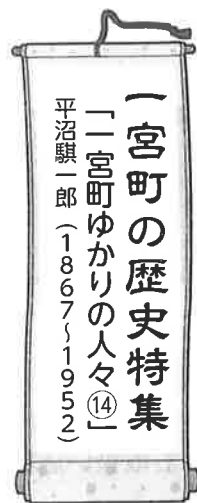
ます。この一宮正木氏についてはまだわからないことが多くあり、その実態や実力がどれほどのものだったのかはわかりません。ですが、この出土した資料やその量、城の遺構から考えるとそれなりの影響力を持った一族だったことが推測されます。そしてそれはまた、この一宮という地域が戦国時代に重要な拠点として存在したことを示す、重要な手がかりであると言えるでしょう。



▲ 出土遺物の一部

【問合せ】教育課 ☎(42)1416

令和元年 6 月号



平沼驥一郎は備前津山藩(岡山県)の藩士の家の出身で、司法界で活躍した政治家です。

平沼を一躍有名にしたのは、昭和14年(1939)1月に第1次近衛文磨内閣の後継内閣として、首相に就任したときです。当時の日本は泥沼化する日中関係、悪化する日英・日米関係など外交面で大きな課題を抱えていました。これらの直面する問題の解決を試みるも、情勢は一向に好転せず、対ソ連、防共(共産主義)という点でドイツとの連携を模索します。日本国内でも親独派・親英米派の対立、海軍省・外務省と陸軍省の対立と政治状況は混とんとしていました。そのような中で8月、突如ドイツがソ連と独ソ相互不可侵条約を締結すると、平沼は「欧州情勢は複雑怪奇」という声明とともに内閣を総辞職しました。

その後は枢密院議長として終戦を迎え、A級戦犯に指定され巢鴨刑務所に入所、東京裁判で終身禁固を宣

告されます。病気のため仮釈放のち、昭和27年(1952)に亡くなりました。

一宮では一宮川右岸、現在の中ノ橋南側あたりに別荘を有していました。現在跡地には石碑が建立されています(一宮93887付近)。

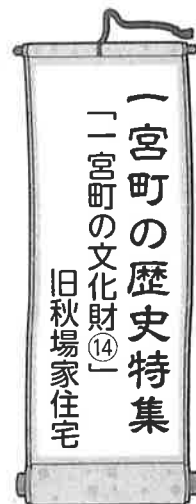
写真の扁額は平沼が玉前神社に奉納したものです。現在は玉前神社の参集殿に飾られています。



▲平沼の書「皇光明日月」。出典は現存最古の漢詩集『懐風藻』(奈良時代)の弘文天皇(大友皇子)の詩歌とみられる。

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416

令和元年 7 月号



旧秋場家住宅は東浪見地区の国道128号沿いにあります。

秋場家は江戸末期から造り酒屋を営んでいた旧家で、かつては網元をつとめていた家です。

敷地は東西に約140m、南北に約55mで、南西の隅に長屋門が、その北側に主屋、東側に土蔵が建っています。敷地は屋敷林に囲まれており、主屋の西側には石灯笼・築山などをそなえた庭園が配されています。

平成29年(2017)6月、主屋、土蔵、長屋門の3棟の建物が国の登録有形文化財となりました。主屋と長屋門は明治前期の1900年頃、土蔵は天保13年(1842)の建築とみられています。現在はイベントスペースやギャラリーなどとして活用されています。

なお、秋場家が所有していた古文書は「秋場家文書」(1,544点)として、千葉県文書館に保管されています。

※現在は外観のみ見学が可能です。



▲旧秋場家住宅主屋外観



▲旧秋場家住宅主屋内観

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416

令和元年 8 月号



白鳥省吾は明治23年(1890)、現在の宮城県栗原市で生まれまし  
た。大正2年(1913)に早稲田  
大学を卒業、旧制中学在学中より詩  
を作り始めており、詩壇デビューは  
大学3年生の時でした。大正3年に  
詩集『世界の一人』を自費出版して  
詩人として認められ、以後数多くの  
詩集や民謡集、評論集、随筆集、童  
話を発表し、民衆詩派の詩人として  
活躍しました。

戦時中の昭和19年(1944)4  
月、東浪見の妻の実家(現在の遍照  
寺付近)へ疎開しました。  
東浪見では、東浪見小学校の校歌  
や「一宮音頭」の作詞など、多くの  
学校の校歌や民謡などを手がけてい  
ます。

戦後は日本農民文学会会長、日本  
歌謡芸術協会会長などを歴任しま  
す。昭和41年(1966)には和洋  
女子大学教授に就任、日本を代表す

る歌人として、活躍の場を広げま  
した。

昭和48年(1973)に食道がん  
のため、83歳で死去。生前に作詞し  
た校歌の数は日本全国で200曲を  
越え、白鳥にまつわる文学碑は全国  
各地で約50基所在します。

そのうちの 하나가、写真の石碑で  
す。昭和45年(1970)に建立さ  
れた、県指定無形民俗文化財・東浪  
見甚句の石碑です。

当時日本詩人連盟会長だった白鳥  
が書したものです。



▲ 東浪見甚句碑 (東浪見 75 - 1 付近)

【問合せ】教育課 ☎(42) 1416

令和元年 9 月号



洞庭湖は江戸時代末期、一宮藩  
主・加納久徴(詳細は「広報いちの  
みや」平成30年2月号7ページを参  
照)が灌漑用に造らせた湖で、広さ  
は約6.8ヘクタール、名称は中国  
の湖南省にある「洞庭湖」に因んだ  
ものです。

記念碑は天保15年(1844)に  
建立され、文面は宮城県にある「多  
賀城碑」(国重要文化財)にならった  
もので、町の指定史跡となっていま  
す。

碑文は左記のようなものです。

- 「洞庭 去大田喜 四里
- 去勝浦 七里
- 去長者町 二里
- 去東金街 五里
- 去藻原 二里
- 去長南 三里

此地享保十二年丙午従五位下藤原  
朝臣久道始所受領地六世孫子従五位

藤原朝臣久徴宝□樹数株于天女以修  
造焉 天保十五年三月十五日」  
工事は一宮藩の家臣・岩堀市兵衛  
が設計し、一宮で代々名主をつとめ  
た中村吉兵衛が完成させたものと伝  
わります。なお、洞庭湖から一宮の  
市街地へ流れる水路は岩堀の名前を  
とって、「市兵衛堀」と呼ばれていま  
す。

また、戦前・戦後にかけて洞庭湖  
を含めた周辺は、桜の名所・観光地  
として、栄え、観光客で賑わいま  
した。



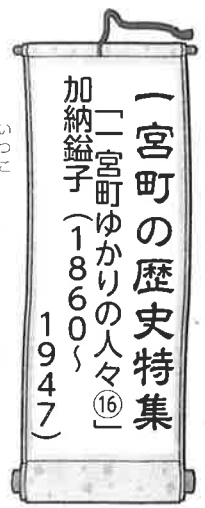
▲ 洞庭湖記念碑



▲ 洞庭湖の景観

【問合せ】教育課 ☎(42) 1416

令和元年10月号



加納鑑子は最後の「一宮藩主・加納久宜(1848〜1919)の妻で、万延元年(1860)、原三陸の次女として生まれました。久宜との間には久朗元千葉県知事など三男七女をもつめました。

明治35年(1902)、東京府入新井村(現東京都大田区大森)に在住していた時、久宜が自宅を事務所として入新井信用組合(現城南信用金庫)を創設すると、鑑子はその事務を補佐したといわれています。

明治43年(1910)に一宮町婦人会が発足すると、その初代会長に就任します。大正2年(1913)に久宜が私立一宮女学校を設立すると、講師となり女子教育に励んだといわれ、一宮の発展の一端を担いました。

なお、入新井村時代の加納家の生活は、明治38年(1905)に中村鈴子の『家庭の模範』という本で紹介されています。この本は華族・名

士・軍人の各家の模範となるべき事例を紹介したものであり、そこに取り上げられているほどですから、全国的にも優れており、著名だったことがうかがえます。

大正8年(1919)に久宜が亡くなった後は、娘の夏子が嫁いだ大分県の麻生家をしばしば訪れていたことが、『麻生太吉日記』(※)からうかがい知ることができます。

昭和22年(1947)死去。享年87歳。

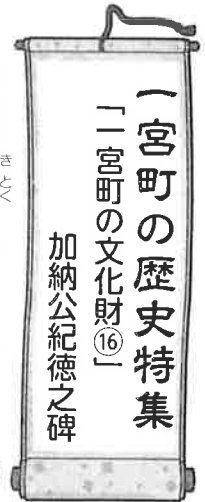
※麻生太吉(1857〜1933)麻生商店社長ほか。現財務大臣、麻生太郎氏の曾祖父にあたる。夏子の義理の父親。



▲ 加納鑑子(町教委所蔵)

【問合せ】教育課 ☎(42)1416  
(町教育委員会 江澤一樹)

令和元年11月号



加納公紀徳之碑は、最後の「一宮藩主」一宮町長もつとめた加納久宜(1848〜1919)の功績を称え、生前の大正7年(1918)に建てられました。当初は旧一宮町役場前(観明寺境内)に建てていましたが、昭和63年(1988)に現在地の振武館駐車場へ移動しました。平成2年(1990)に町の指定史跡に指定されています。

大きさは幅2m、高さ3メートルで、久宜の業績について約6000字の漢文が刻まれています。撰文は後藤新平(1857〜1929、満鉄初代総裁、外務大臣ほか)、書は野村素介(1842〜1927、貴族院議員ほか)によるものです。扁額は徳川家達(1863〜1940、貴族院議長ほか)によるものであり、当代の著名人がこの石碑の制作に関わっていたことがわかります。



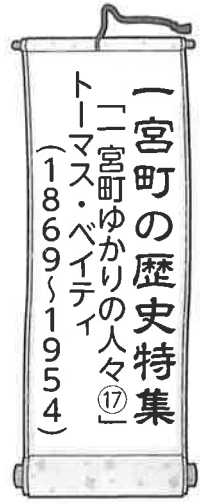
▲ 加納公紀徳之碑



▲ 絵葉書「加納久宜と一宮町役場」  
戦前の絵葉書。役場写真の左側に石碑がみえる。

【問合せ】教育課 ☎(42)1416  
(教育委員会 江澤一樹)

令和元年12月号



「一宮町の歴史特集」  
「一宮町ゆかりの人々」⑬  
トーマス・ベイティ  
(1869〜1954)

トーマス・ベイティはイギリスの著名な国際法学者で、大正5年(1916)に日本政府の要請で外務省の法律顧問に就任し、開戦直前の昭和16年(1941)までこの職を務めた人物です。

戦前は日本の法律顧問として、日本の中国における立場(満州国の建国など)を一貫して擁護しました。開戦前夜の昭和16年、日英関係が悪化する中でイギリスへの帰国を勧告されますが、「わたしの場合、帰国するということは、平和への希望を全て捨て去ることである」として日本にとどまりました。

開戦後、法律顧問の職を辞しますが、その後彼の書いた論評には連合国(米英など)への批判が書かれており、親日的な立ち位置にあったと思われる。

しかしながら、戦中は軍部や警察から「敵性外国人」ということで、様々な嫌がらせを受けたため、日光・中禅寺湖に疎開していました。

戦後、戦前の日本政府への協力を理由として、東京の英国大使館により戦後旅券発給が拒否されてしまいます。祖国からは「反逆者」として

の汚名を着せられたまま、亡くなるまでイギリスへの帰国を認められませんでした。

昭和24年(1949)、時の吉田茂首相の配慮により、吉田が親交のあった加納久朗の一宮町追手の別邸へ転居しました。一宮ではベイティは町民の人々とよく交流していたといえます。

昭和29年(1954)2月9日、一宮にて死去。享年85歳。



▲晩年のトーマス・ベイティ  
(同「黄昏の国際法」より)



▲加納久朗別邸(戦後の絵葉書)  
ベイティが居住したと思われる

令和2年1月号



「一宮町の歴史特集」  
「一宮町の文化財」⑬  
貝殻塚貝塚  
かいがらづか

貝殻塚貝塚は現在の一宮中学校からみて北西付近にある貝塚で、丘陵の突端に位置しています。「貝殻塚」という小字が残っている通り、古くからこの一帯が貝塚であると認識されていたことが分かります。昭和53年(1978)に町の指定史跡となつていますが、現状、貝塚の様子を視することはできません。

昭和12年(1937)に発掘調査が行われ、海拔約10mの緩斜面に厚さ約20〜30cmの貝塚が形成されていました。年代は約4,000年前の縄文時代前半と推定され、磨製石斧、石皿、土偶、骨製品、貝輪に加え、釣り針などの漁労用具も確認されています。

また、チョウセンハマグリやダンベイキサゴ(ナガラミ)、クロガイ、マグロ、フグ、クジラ、サメ、カメの骨格片、岩礁につくアワビ、サザエ、コダマガイなども見られ、出土した魚介類から外洋性貝塚の特色が見られます。

写真はこの発掘調査時に見つかったものではありませんが、貝殻塚貝塚から出土したものと伝わっています。

千葉県は海に面している地域が多く、県内各地に多くの貝塚があります。千葉市の加曾利貝塚は平成29年(2017)に国の特別史跡に指定されています。さらに、袖ヶ浦市の山野貝塚が、平成29年(2017)に国の史跡に指定されており、貝塚は千葉県の縄文時代を語る上で欠かせないものだといえるでしょう。



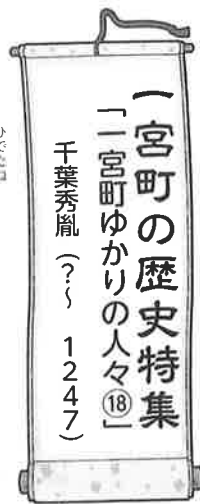
▲貝殻塚貝塚出土の貝類と伝わる。  
(一宮町教育委員会所蔵)

【問合せ】教育課 ☎(42)1416

(教育委員会 江澤一樹)

【問合せ】教育課 ☎(42)1416  
(教育委員会 江澤一樹)

令和2年2月号



（一宮町の歴史特集）  
「二宮町ゆかりの人々⑱」  
千葉秀胤（？～1247）

千葉秀胤は上総千葉氏の千葉常秀の子で、鎌倉時代に御家人として活躍した人物です。

上総千葉氏は寿永2年（1184）に源頼朝によって肅清された上総広常の地盤（上総国玉崎荘ほか）を継承した一族で、千葉氏宗家である下総千葉氏の系譜を引いています。

秀胤は寛元2年（1244）には幕府の評定衆（幕府の最高政務機関）に加えられます。これは千葉氏では唯一であり、当時の秀胤は千葉氏宗家をしのぐ力を有していたことが分かります。

そのため一族の代表として活動し、三浦氏らとともに前將軍・藤原頼経（1218～56）を押し立てて、執権・北条氏と対立しました。寛元4年（1246）の宮騷動（名越光時の反乱未遂、藤原頼経が鎌倉から追放された事件）により反北条氏勢力が失脚すると秀胤も評定衆を更迭され、所領を一部没収されます。

宝治元年（1247）6月、宝治合戦で執権北条氏により三浦泰村・光村が滅ぼされると、三浦氏と姻戚関係にあった秀胤も追討の対象となります。同年6月7日、くしくも千

葉一族の大須賀氏、東氏らが秀胤の本拠地である上総国玉崎荘大柳館（睦沢町）を攻撃、秀胤は館に火を放ち息子ら一族郎党163名とともに自害しました。これにより上総千葉氏は滅亡します。

一宮町において、上総千葉氏の痕跡は残念ながら確認できていません。しかしながら、上総氏の地盤を引き継いでいる点、本拠地が大柳館であった点を考えると、上総国一之宮である玉前神社の所在する地域は、上総千葉氏にとって重要な場所であったといえます。

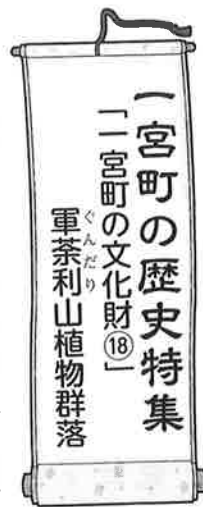


▲大柳館跡の標柱  
（睦沢町北山田 235 付近）

（教育委員会 江澤一樹）

【問合せ】教育課 ☎（42）1416

令和2年3月号



（一宮町の歴史特集）  
「二宮町の文化財⑱」  
軍荼利山植物群落

軍荼利山は九十九里平野に面した標高約75mの丘陵で、気候は温暖で降水量も多く、スダジイを主体とした常緑広葉樹林におおわれていま

す。長年信仰の対象として保護され、現在も約4ヘクタールの山林の大部分が自然の景観をとどめています。特に山頂部のスダジイ林は、直径1メートル近いものも見られ、自然林の様相を呈しています。

この山は昔、漁師たちが海の位置を知る目印としても使われました。

植生はスダジイを中心として、アカガシ、アラガシ、タブノキ、シロガモ、ヤブニツケイなどからなり、森林内の地面にもコバノカナワラビ、イズセンリョウなどの常緑性の草本や低木が繁ります。カゴノキやリンボク、キジヨラン、サカキカズラ、ハナミョウガなどのほか、タブノキ等に寄生するオオバヤドリギなど暖地性の植物が随所に生息しています。

また、この山の北西側は中腹から地下水がしたり落ちており、周囲は湿った環境となっているため、暖地性のシダ類の宝庫となっています。

す。カツモウイノデ、クリハラン、ハチジヨウカグマ、ノコギリシダ、マツザカシダなどの貴重なシダ類も生息しています。さらに境内にはレッドリストの保護生物・ハイハマボツスも生息しています。県内で間近に見られる数少ない生息地となっています。これらの植物は「軍荼利山植物群落」として、昭和32年（1957）1月17日に県の指定天然記念物に指定されています。



▲軍荼利山（南東より）



▲東浪見寺へ続く参道

【問合せ】教育課 ☎（42）1416  
（教育委員会 江澤一樹）